

ひとりだって つながっている

性別や考え方に関わりなく、おひとりさまが増えています。それぞれ何を考え、何を目指しておひとりさまを続けているのか、一人で生きるということはどういうことなのか、いろいろな方の話を聞いてみました。その中から見えてきたのは、やっぱり「ひとりでもつながっている」でした。

おひとりさまのバランス感覚 ひとりでもひとりじゃない



川崎けいこさん。映像ディレクター。40代。アフガニスタン難民の映画「ヤカオランの青春」を製作したのをきっかけに「ひらく」にも何度か紹介されている。

一人暮らしをしていると、どんな人と付き合いたいのか、人間関係に対するアンテナが敏感に働くようになるみたいで、そういう、ピッときた時にすぐに相手に会いに行きたい。それがアフガニスタンだったりしてもひとりですから行けちゃう。そういう自由さはメリットですね。現実は一人で生活はしていますけど、何かあったときに絶対に一人じゃないという、人間関係を作ってきたと思っています。だからもしも、今仕事も住まいもなくたって実家や友達や、仕事仲間や、とにかく誰かが必ず手を差し伸べてくれる、という都合のいい安心のもとに、頑固にブラ

イバシーを守り一人暮らしを続けるのって、なんかいいところ取りって感じですが、そのくらいの緩さで暮らすのが、一人暮らしを続ける秘訣かもしれないですね。

◆好きなことを仕事にする

職業は映像ディレクター、好きで始めました。公務員をやった後どうしてもやりたくて飛び込んだんですけど、今から思えば、一人で暮らしていくためには好きな仕事とあってたんですね。人それぞれかもしれないけど、好きでもない仕事をしながら一人で生きていくのは、私にとってはかなり辛いことで、これからおひとりさまを目指す(笑)人にも、ぜひ自分の性に合った好きな仕事を見つけて欲しいと思います。一人で暮らすということは、自分の時間が自由に使えるということなんだけど、時としてその自由さを仕事のために譲らなくてはいけないときがある。そんな時、仕事が好きだったらそ

れを楽しむことができるわけですね。これは自分にとって、とても重要なことだと思っています。

◆保険と年金はひとりごとで強い味方

映像ディレクターというのは、「収入が不安定なので、経済的なセーフティーネットを用意しています。保険は違うタイプを3つ。年金は、この間ちよつと調べてみたら、公務員時代から、掛け金を一度も滞らずに納めていて、これは我ながらえらいな」と(笑)。自由を守るためには、必要な投資ですね。

◆恋人はいます

ブライバシー、好きな仕事、ぜいたくを言わなければ生活できる経済力、みんな私には大切ですが、愛が必要です。愛のない生活は、どんなに安定していてもつまらない。多くの人は、年をとったら、恋人なんてと思っ込んでいるようですが、いくつになってもそれ相応の恋人は現れます。そして、振り返ってみれば、私のそばにはいつもそういう人がいました。これはとても幸運なことです。

ドイツでの国際結婚



中川咲子さん。美術作家。工房フォルム主宰。「ひらく」7号の表紙も中川さんの作品です。

30代に仕事でドイツへ渡った時に知り合った、建築家をめざす大学院生と結婚しました。ドイツ人の彼は「夫婦中心の生活をし、子育ては他人の手を借りる」のが当たり前。私は自分の中の日本的価値観を壊してドイツで生きていく決心をしたものの、子育てでは「母子中心の生活をして、夫婦で子育て」がしたかった。国際結婚のむずかしいところだ。

子どもを産んだ後、ベルリンの壁が崩壊。あちこちで暴動が起こり、明日どうなるのかもわからず、想像を絶する状況でした。ある日、子どもをベビーカーに乗せて歩いていたら、ネオナチに「日本へ帰れ！」と取り囲まれた。家にたどりつき夫に訴えると、彼らを批判するわけでもなく「あ、そう……」と。

夫が子どもと私の味方になってくれなかった、というショックはあまりにも大きかった。その後しばらくして彼と別れ、子どもと日本へ戻ったのです。

◆地域の中で子育てを

日本では、自宅の制作アトリエを開放して造形・音楽など子どもの情操教育のための教室を開きました。今、こどもアトリエ「フォルムクラブ」として、たくさんの方との関わりの中で運営されています。そんなこともあって、我が家にはいろんな人間がやってくる。いろんな価値観の中で子育てをしたかったのが、必然的に実現した感じ。息子は今、大学受験生。予備校に通いたいと言われたけど学費が高くて払えない。教育ローンを申請したら、厳しいことを言われ、何度も担当の人と話して、説得して：「ようやく認めてもらった。頑張ってるよ。ローン」は息子が返済すると思います。

◆ひとりが好き。人間が好き。

私は小さいときから団体行動は苦手。「ひとりが好き。創作するためにも「ひとり」になりたかったし、子どもも「ひとり」で育てたかったんです。

世界各国の家族を見てきました。日本の家族は、夫がいて妻がいて子どもがいて、と画一的ですね。私はいろんな人間が生きているコミュニティの中で子どもを育てたい。「ひとりが好きだけど、「人間」が好きなんです。

15歳で一人暮らし



いつでも20代のジムさん。学園坂商店街にあるゲンバン・カフェのオーナー。

ベトナム人の父は4カ国語が話せるから、自分は英語ができるようになるうとオーストラリアの高校へ行きました。初めての一人暮らしで、学校以外でも毎日が勉強でした。ハンバーグを初めて作ったとき、つなぎを知らなくてポロポロになってしまい泣きながら食べて、母に電話して作り方を聞きました。洗濯は白いものと赤いものを区別しないで、その結果ピンク色の服を着て行かなければなりませんでした。当時住んでいた街はクスリの常習者や犯罪も多く、友達が無事荒らしに銃で殴られて、身の危険を感じることもありました。

◆一人暮らしは自由

日本は安全。帰宅時間が遅くなってもほとんど危険を感じたことはないです。住処に帰った時は好きなことをします。「ワー、あったかい」と言いながらお風呂に入

ったり、ダイエットのためテレビCM中に腹筋運動をしたり、一日中お店の改造のことを考えたり：自由ですね。仕事で食器を洗うのは苦にならないのに、自宅では食器洗いが嫌いで、食洗機を買いました。好きなことの一つはお店のこと。改造のアイディアが浮ぶとノートに描いています。休日は仕入れついでにお店に合うものを探したり、カフェ巡りもします。いいなと思っても買わないで、廃材を利用して自分で改造します。

◆自然とできた親しい人たち

何でも話せる親しい人たちは自然とできました。同じ価値観を持っているというか、初めて会った人なのに話せる人。お互いに人間だとわかる人。今まで話さなかつた人でも商店街のイベントなどでボランティアで参加して、一緒に頑張ったりするといつのまにか仲間になっていきました。

人がのんびりしたり、楽しい話をしてたりするのを見ているのが好きです。そういうお店をめざします。



人を支える、
人に支えられる



鈴木久さん(83歳、鈴
井日当りのい備、型
大居間は暖房が見られる
液晶テレビもあって快適。

平良さんの毎日は、朝7時半から8時20分まで、道路に立って小平第八小学校の子どもたちが通学するのを見守る仕事から始まる。それが縁で校長から「学校経営協力者」を依頼され、1学期に2、3回、会議にも出ている。

火曜日は、小平第二小学校にある高齢者交流室に行く。ここに来る男性は2人だけだが、「女性と話している方が、話が広がって楽しい」という。

曜日は決まっていないが、週1回、発達障害者のグループ・ホーム「クローバー」に行く。食事を共にしたり、話相手になったりしている。

他人とコミュニケーションが苦手な彼らにとって、平良さんは数少ない「友達」。来るのを首を長くして待っているとか。「これは社会

貢献だね」と平良さん。

社会貢献といえば、金曜日は午後1時から4時まで、骨髄移植推進財団で白血病患者や家族からの問い合わせ電話を受けたり、案内パンフを送付する仕事をボランティアでしている。

その他に、町内会の会計をしていて、近所にある小平市あおぞら福祉センターにもイベントがあると顔を出す。

◆米寿までは迎えに来るな

平良さんは、4年前に奥さんを亡くされてから、一人暮らしだが、外に出ればいつも傍らに人がいる。人を支える仕事をしながら人に支えられている、そんな日々を楽しんでいる。

そのリズムが崩れたのは昨年、脳梗塞で1か月半、入院したときだけ。幸い治療のかいあって、今は右ひざに後遺症が残るものの、日常生活に不自由がない。

医者からは「杖を持つように」と言われ、杖を買ったが持たずに出かけている。「これからはスローリ学生で行きますよ」という平良さん。まだまだ人生を楽しみたいらしく、毎日、仏壇に線香をあげるとき、「米寿までは迎えに来るなよ」と、奥さんに言っているそうだ。

聞いてみました

不安・将来・友達

40代・女性・会社員

一人暮らしは、実家を出てからだから13年くらい。



不安なのは、ゴキブリが出たとき。本当に嫌いだから、パニックになったわ。今までで2

度出現。なにが不安で、やっぱりゴキブリよ。防犯上のはそんな不安な感じはしない。住んでいるアパートはいつも人の気配があるから怖くない。帰宅して一番にすることは、電気とテレビをつけること。音とか気配とかがあると安心する。



将来、一人なら、一戸建てでもマンションでもいいから自分が所有する不動産に住んでいたい。



小学校1年生のときからの友人。今は遠くに住んでいるけど何でも話せる親友ですね。両親も、妹一家も小平市内に住んでいます。やっていて楽しいこと？誰かのために食事やお菓子を作ったりするのが好きだから、楽しいですね。あっそれから寝るときも。

60代・女性

一人暮らしは、母が亡くなってから。もう28年ですわね。



7、8年前になりましたか、恐ろしかったのは、留守電に脅しのメッセージが入っていました。夜中に聞きました。思い当たるふしもなく、その一回だけでしたが、なんとなく恐怖心は続きました。早朝に玄関のベルを鳴らす人もいます。

隣近所の人たちとは、母の代から仲良く、助け合っています。



40代の頃、先輩の女性から「10年先を見て生きる」と、教えられました。そろそろ老後の域に入ります。友人が住みだしたコレクティブハウスに入居しようかと思っています。



日ごろの活動仲間を入れて、友達が多い方だと思います。人との交流は大事なことで、日常生活のことから生き方まで話し合うことは生きがいです。もちろん寂しさを感じることもあります。秋の夕暮れなどは特に。でもこれは生きていると誰でも感傷かも知れませぬ。楽しみは、今の活動が思うように進んでいくこと。自身では息抜きはコーラスでしょうか。